

## 第 9 回 大阪府河川周辺地域の環境保全等審議会 議事要旨

開催日時	平成 29 年 3 月 24 日(金) 15:30~17:30
開催場所	大阪府安威川ダム建設事務所 5階 大会議室
出席者	岡田委員、神田委員、高柳委員、田中委員、鶴田委員、平井委員、○養父会長、山崎委員 計 8 名(欠席：片野委員、竹林委員) (○：会長、敬称略、五十音順)
概要	<p>平成 28 年度調査結果と環境保全対策の取組み、安威川ダム環境改善放流検討部会の検討内容(水質予測検討)について審議した。</p> <p><b>【資料 1】「平成 28 年度調査結果と環境保全対策の取組みについて」</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>資料 1 についての委員の主な発言は以下のとおり。</li> </ul> <p>鶴田委員</p> <p>保全の対象であるアジメドジョウ、アカザについては、河床や底質の状態が重要な生息要件である。個体数の変動だけではなく、河床等の状況も合わせて記録すること。</p> <p>養父会長</p> <p>河床の環境の構造を明らかにし、保全できるように記録することが重要である。</p> <p>平井委員</p> <p>ビオトープは、確認種の内容から、良い環境が整備できていると考えられる。ただし、ビオトープ山側の道路及び側溝により、山裾の樹林地とビオトープが分断されている可能性があるため、改善を検討すること。具体的には側溝に蓋をすることや、水路を移動できるようにする方法がある。</p> <p>山崎委員</p> <p>安威川ダム周辺では、オオタカ、ハチクマ、サシバ、フクロウといった、里山の生態系上位性種が多数生息する良好な自然環境が残されていた地域であるが、ダム事業以外の多くの開発行為によって、森林が伐採されてしまった。今後は、逆にダムができることによって里山の自然環境を維持する場所になるよう努めること。</p> <p>養父会長</p> <p>ダムの水位変動域などに樹林環境を残して、環境を保全する必要がある。</p> <p>平井委員</p> <p>オオタカは、巣に残った羽毛の DNA により、系統を明らかにする方法がある。</p> <p>高柳委員</p> <p>キクガシラコウモリは大阪府の絶滅危惧種に指定されていることから、閉塞した横坑周辺で生息が維持されているかどうか確認する必要がある。</p>

岡田委員

オオサンショウウオの環境DNA調査について、繁殖期に環境DNAの濃度が高まるという知見があることから、繁殖期に調査を行うことが効率的である。また、環境DNAの採取の際に周辺の個体の分布を確認できれば、環境DNAの濃度と個体の位置や採水時の流量との関係について、知見が深まる。

田中委員

高水時調査結果について、流量とSS濃度及び自動観測による濁度の状況を整理し、調査結果が出水のどの時点の状況を表したものが明らかにする必要がある。

平井委員

オオムラサキの保全ではエノキだけではなく、クヌギの生育も重要である。調査の際に、クヌギの生育状況も記録した方が良い。

#### 【資料2】「安威川ダム環境改善放流検討部会の検討内容について（水質予測検討）」

- ・資料2についての委員の主な発言は以下のとおり。

田中委員

将来の水質悪化のリスクに対して、事業者として実行可能な保全施設の準備など、検討内容が改善されたと評価する。ただし、予測条件、予測技術、保全施設等、多分に不確実性が含まれていることについて、説明が必要である。例えば、大岩川からの負荷の与え方について、本川と支川で流出パターンが異なるため、本川からの流量が増大する前に高濃度の濁水が大岩川から流れ込み、貯水池内に滞留することや、将来ダム湖に堆積する底泥について、現状の土壌の調査結果から類推していること等が考えられる。

これらの不確実性について、リスクを過小評価しない、安全側の検討になっていることを説明できるように整理する必要がある。

また、流入負荷対策は、ダム事業者だけでは対応困難であるため、良好な河川環境を保全するためには流域の協力が必須である。

神田委員

貯水池の形状が堆砂により変化することも、予測の不確実性の一つと考える。

#### 「安威川ダムの自然環境保全対策について」に関する答申

安威川ダムの自然環境保全対策に関する答申を頂く。

以 上